

ひいおじいちゃんの「あの日」から今の私へ

岐阜市立藍川中学校 3年

神田 陽彩

原子爆弾。とても恐ろしい爆弾。このたった一発の爆弾で、およそ14万人の方が亡くなりました。本当にこの原子爆弾を日本に落とす必要があったのでしょうか。今日は広島で原爆を体験した私のひいおじいちゃんの実体験をもとに、私が感じたこと、考えたこととお話します。

ひいおじいちゃんは広島で生まれ、広島で育ちました。第2次世界大戦が始まった頃、おじいちゃんは幼い子供でした。原爆が落ちた時、爆心地からおよそ2km離れたところにいたそうです。そして、家の下敷きになっていたところを助けられたと聞きました。

原爆が落とされた瞬間、広島の街は家も建物も焼け、いつも通りの日常が突然消えてしまったそうです。見慣れない風景、静まり返った町、泣いている子供達。戦後から復興までの地道な長い道のり。実際に体験した人にしかわからない話を聞きました。

その話を聞いたたびに、私は胸が締め付けられるような気持ちになりました。視覚、聴覚、嗅覚。感覚の一つ一つが、その当時の悲惨な現実を語っていました。私は言葉を失いました。そんな中でもひいおじいちゃんが生き延びてくれたからこそ、今、私はここにいます。

そんな私は、5月末に中学校のみんなと修学旅行で広島を訪れました。被爆した人々の写真や遺品を目にした時、これまでに聞いてきた話が思い出されました。言葉だけでなく、実際自分の目で見て感じることで、より一層、戦争の恐ろしさや命の重みを受け取りました。

また、原爆を体験した被爆者の方の話も聞けました。その方も、ピカドンにより、本当のお兄ちゃんのように慕っていた人を失ったとおっしゃっていました。

失われた命は、これらの命だけではありません。私たちは、社会の授業で2度の世界大戦について学びました。多くの国々が争い、多くの命が失われました。そして、その後も世界から争いはなくなり、こうしている今もたくさんの命が失われています。

私は、それらの授業を通して、戦争は「自分がよければいい。自分の国がよければいい。」という人々の思いによって起きると考えました。この身勝手さのせいで、戦争と何の関係もない人たちの命が奪われ、学校に行けなくなっている子供達もいます。

私は学校が好きです。学校に行けない毎日なんて考えられません。今、当たり前前に受けている授業がどれほど素晴らしく、どれだけ幸せであるのかを実感しました。

戦争をなくしたい。今までそう思っていました。しかし、修学旅行や授業での学びを通して、戦争をなくすことは難しいことなのだと知りました。きっとこれから何年も戦争は続いていくでしょう。しかし、なくすことはまだできなくても、減らすことは今すぐできると思うのです。原子爆弾の存在は、まさに「減らすことのできたもの」だと考えます。これこそが、今の私たちが大切にしなければならない感覚なのです。

では、戦争を減らすために、今の私達には何ができるのでしょうか。私は、まず相手を思いやる気持ちをもつことが大切だと考えます。相手の気持ちを考え、違いを認め合うこと。小さなことかもしれませんが、その積み重ねが平和に繋がるのです。

ひいおじいちゃん、ありがとう。ひいおじいちゃんが生き延びて、命を繋いでくれたから、私はこの15年間、1人1人と向き合いながら生きてくることができました。

そして、私もこの命を繋いでいきます。この先何があろうと私の「らしさ」である「1人1人と向き合う」を大切に、これからの人生を歩んでいきます。そんな私の人生が戦争を減らすこと、無くすことに繋がると信じて……。